

## 創作文学としての「松坂の一夜」

宣長は、真淵との出会いについて、自身の日記に「廿五日、曇天 ○嶺松院会也 ○岡部衛士当所一宿【新上屋】、始対面」（嶺松院歌会に出て、賀茂真淵が松坂旅宿新上屋に一晩宿泊したので始めて対面した）と記している。

さらに、彼は、『玉勝間』「二の巻」に載せた3編、「おのが物まなびの有しやう」、「あがたみのうしの御さとし言」、「おのれあがたみの大人の教をうけしやう」に、①真淵の名は『冠辞考』によって知ったこと、②『冠辞考』の内容は当初信じられなかったが、再三読み返すうちにいにしえの言葉と心についての学説に心服するに至ったこと、③たまたま真淵が松坂に宿った一夜に宣長はその宿におしかけて初対面を果たし、その後入門するに至ったこと、④師弟間の質疑応答はもっぱら書簡の往来によったことなどを書きとどめている。宣長の師匠選びは、慎重かつ周到な手順を踏んで意志的に進められたのである。

ところで、佐々木信綱が著わした「松坂の一夜」（『賀茂真淵と本居宣長』所収）の方では、宣長と真淵のたった一夜の出会いは、『古事記伝』という偉大な成果をもたらした劇的な出来事として描かれている。

しかし、日記及び『玉勝間』の行文を読む限り、たった「一夜」の出会いであったということは、それが運命的なものだったということ言うためではなく、師弟間の学問考究がもっぱら書簡のやりとりによって根気よく進展していったことを言うために触れられているに過ぎない。

宣長がその出会いの不思議さについて神秘的な運命を感じたというような痕跡は毛頭ない。むしろ、真淵が松坂に寄宿した機会を「うかぢひまちて、いといとうれしく、いそぎやどりにまうでて、はじめて見え奉りたりき」（「おのが物まなびの有しやう」）という書きぶりが示しているのは、出会いを自らの積極的な行動によってものにしたという純粋な喜びに他ならない。

また、「はじめて見え奉りたりき」という文言が示すのは、初対面の意義が挨拶にあったことであり、そのことは日記の簡潔な文言と符合するのである。

しかし、佐佐木は、そのはじめての会見を、真淵が自身の古学の未完成を謙遜し、若い宣長に後継者として『古事記』の注釈の完成を託したという美しい「物語」にしたのであった。

実際、「松坂の一夜」が醸成している老大家と少壮学徒との一対一の緊迫した出会いであったという印象は、佐佐木自身が作品の後に付した「附言」によって、虚構の産物であることが明かされている。その「附言」で、佐佐木はこう述べているのである。

「余幼くして松坂に在りし頃、柏屋（＝松坂の古書屋、筆者注）の老主人より聞ける談話に、本居翁の日記、玉かつまの数節等をあぎなひて、この小篇をものしつ。県居翁より鈴屋翁に贈られし書状によれば、当夜宣長と同行せし者（尾張屋太右衛門）ありしものゝ如くなれど、ここには省きつ。」

(私が幼くて松坂に住んでいた頃、柏屋という本屋の老主人から聞いた談話に、宣長の日記、『玉勝間』の数節をよりあわせて、この小篇を執筆した。賀茂真淵から本居宣長に贈られた書状によれば、当夜は、宣長に同行した者（尾張屋太右衛門）があったようだが、ここでは省略した。)

文献主義的な研究が大半を占める書物において、佐佐木が「柏屋の老主人より聞ける談話」を一つの核として採用したということも興味深いが、私が興味を持つのは、むしろ、真淵の書状に記されていた同行者の存在を佐佐木が省いたということの方である。真淵は手記にも「尾張屋太右衛門」という同行者について記しており、それによれば、太右衛門は一言もしゃべらなかつたらしい（「伊藤主膳と申者之事」、『本居宣長稿本全集』第2輯、1923年、博文館刊）し（本居宣長記念館のウェブサイトの記事「廊下に座る男」

[http://www.norinagakinenkan.com/norinaga/kaisetsu/rouka\\_suwaru.html](http://www.norinagakinenkan.com/norinaga/kaisetsu/rouka_suwaru.html)

参照)。

となれば、それは、事実上は真淵と宣長の一対一の会見に等しかつたにちがいない。佐佐木もそれは踏まえてそういう同行者の存在を省いて「小篇をものし」たのであろうが、事実そのままを描かなかつたのは、この「小篇」をしてあくまでも事実を種とした「物語」として描いた意図によるのであろう。

若い宣長は何らかの理由で、真淵から「廿余歳と見え」た尾張屋太右衛門という同行者をともなって真淵の前に出たのであつたが、その太右衛門を省いたことによってできあがつた物語の絵面は、実際の会見の絵面とはだいぶ違った印象になってくる。この微細な工夫は、老大家・真淵と少壮学者・宣長との出会いを、正当な国学の学統の継受と『古事記』の注釈事業の本格的な開始とをもたらしした物語としてより鮮明に、より美化して描こうとする意図によるのだろう。

なるほど、真淵は宣長に対して

われはもとより、神の御典をとくまと思ふ心ざしあるを、そはまづからごころを清くはなれて、古へのまことの意をたづねえずはあるべからず、然るにそのいにしへのこころをえむことは、古言を得たるうへならではあたはず、古言をえむことは、万葉をよく明らむるにこそあれ、さる故に、吾はまづもはら万葉をあきらめんとする程に、すでに年老て、のこりのよはひ、今いくばくもあらざれば、神の御ふみをとくまでにいたることえざるを、いましは年さかりにて、行きき長ければ、今よりおこたることなく、いそしみ学びなば、其心ざしとぐるること有べし、

(「あがたみのうしの御さとし言」筑摩版全集第1巻、p.86)

云々と論じたとある。そして、この部分こそ、佐佐木の描いた「松坂の一夜」で真淵が宣長に語つた内容に一致するのである。

しかし、それが言われたのはいつのことであつたか。

実は、この文章の直前には、「宣長三十あまりなりしほど、県居ノ大人のをしへをうけ給はりそめしころより、古事記の注釈を物せむのこころざし有て、そのことうしにもきこえけるに、さとし給へりしやうは」(筑摩版全集第1巻、p.86)とある。

とすれば、宣長が「古事記の注釈を物せむのこころざし」を真淵に告げたのは、「県居ノ大人のをし

へをうけ給はりそめしころ」のことであり、入門後のことだ。この行文を読めば、「松坂の一夜」で宣長が真淵に『古事記』の注釈を書きたいと告げたというのは虚構だと分かる。

さらに、「おのれあがたみの大人の教をうけしやう」によれば、宣長が真淵に会ったのは一度だけのことであって、その後はひたすら頻繁に書簡を交換して問題を考究したのであるが、その数多の書簡は、「せちに人のこひもとむるまゝに、ひとつふたつととらせけるほどに、今はのこりすくなく」なってしまったとあって、その行文にすぐさま続けて、「さて古事記の注釈を物せんの心ざし深き事を申せしによりて、その上つ巻をば、考へ給へる古言をもて、仮字がきにし給へるをも、かし給ひ、」云々とある。

これによっても、宣長が『古事記』の注釈を著わしたいという志の深いことを告げたのは、その書簡での往来においてのことであったことが了解される。

『玉勝間』全編の注釈書である日本思想大系『本居宣長』の頭注にも特に注はなく、また、その巻末に載せられた「解説」は、佐竹昭広、日野龍夫、吉川幸次郎の三者によって分担執筆されているが、「松坂の一夜」の虚構についての記述はない。日野龍夫が佐佐木信綱の「虚構」に気づいていなかったとは思えないのだが……。

ところで、小林秀雄の『本居宣長』の功績の一つは、宣長がその生涯において奇行めいた行動をしたことがほとんどなく、常識人として自己を治めていた人であったことを確かめたことで、このことからしても、宣長が入門後に初めて『古事記』注釈を著わしたいという計画を師に告げたと取るのが真っ当な解釈というものであろう。

私は、真淵（県居の大人）が宣長に対して重要な「さとし」を与えたのは、その書簡を通じてのことであったとするのが自然だと思う。それを「松坂の一夜」のやり取りとして描いたのが佐佐木信綱だったわけである。

2020年3月27日 研究代表者 西澤 一光